



Title	西村天囚の懷徳堂研究と『懷徳堂考之一』
Author(s)	竹田, 健二
Citation	懷徳堂研究. 2025, 16, p. 87-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104395
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西村天囚の懷徳堂研究と『懷徳堂考之一』

竹 田 健 二

はじめに

西村天囚は、明治四三年（一九一〇）一月二十九日に開催された大阪人文会の第二次例会において五井蘭洲に関する講演を行い、九日後の二月七日から二七日まで大阪朝日新聞に「懷徳堂研究其一」を合計二〇回連載した。この連載は完結時に「懷徳堂考上巻」と改題され、同年三月六日に連載時の紙型を用いて三五部印刷された。

この時期の天囚の懷徳堂研究の実態を理解する上で重要と考えられる新資料『懷徳堂考之一』（抄本、一冊）が、二〇一七年に始まった天囚の故郷・種子島の西村家所蔵資料の調査により発見された¹。本資料の前半部は、天囚が大阪人文会における講演までに執筆していた約五〇枚の漢文の草稿であり²、また後半部は、講演の直後に行っ

た取材の記録や関連資料からの抄出と見られ、『懷徳堂考之一』は全体として、「懷徳堂研究其一」の連載を執筆する際の草稿にあたると思われる。

本稿では、『懷徳堂考之一』の前半部を中心に検討し、天囚の懷徳堂研究の展開や天囚の研究姿勢について考察を加える。

一 外題・内題・構成

本章では、『懷徳堂考之一』の外題と内題、及びその前半部の構成について検討する。

発見時の本資料の表紙は、激しい虫損のため、外題の有無も不明であったが、修復の結果、文字は不明であるが外題が打ち付け書きされていたこと、外題の文字の下部右側に「考」字が書き添えられていることが判明し

た。^③ 内題についても、発見時は表紙と本文冒頭の数葉とが圧着して開くことができず不明であったが、修復により、当初墨筆で「懷德堂研究之一」と記され、後に「研究」の文字の上に墨筆の楕円が、またその右に「考」字が書き加えられて、「懷德堂研究之一」から「懷德堂考之一」に修正されていることが判明した。^④ 内題の修正を踏まえるならば、外題も当初は「懷德堂研究」と記されており、後に「研究」の文字を見せ消ちにし、かつその右側に「考」字を書き添えて、「懷德堂研究」から「懷德堂考」に修正されたと考えられる。前述の通り、大阪朝日新聞での連載の題名は当初「懷德堂研究其一」だったが、完結時に「懷德堂考上巻」に改題された。本資料の内題・外題の修正は、連載の改題と基本的に符合すると見てよい。

なお、修復により、表紙には外題の他、右側に「五井持軒 五井蘭洲 三宅石菴 三宅春樓」と打ち付け書きされていたことも判明した。五井持軒と五井蘭洲とは、後述する本資料前半部の二つの章の見出しであり、三宅石菴は蘭洲の章の中の節の見出しと合致する。三宅春樓は章・節の見出しではないが、蘭洲の章の「教育之功」節に言及がある。こうしたことから、この文字列は本資料の概要を示すために表紙に記されたものと推測される。

る。

続いて、『懷德堂考之一』前半部の構成について検討する。本資料の前半部は、冒頭の「叙論」と、それぞれ「五井持軒」・「五井蘭洲」との見出しを附された二つの章とからなる。詳しくは後述するように、両章の中には、それぞれ見出しの附された複数の節が設けられている。こうした構成から、天囚は「懷德堂考之一」を執筆する際には、学者を一人ずつ取り上げて論ずる、いわば列伝形式で懷德堂研究に取り組んだと考えられる。

このことを傍証するのが、『懷德堂考之一』の持軒の章の中の「三宅石菴」節の見出しの下にある、朱筆で記された「入于持軒伝之後蘭洲伝之前」（持軒伝の後、蘭洲伝の前に入れん）との一文である。天囚は、持軒・蘭洲について述べた二つの章を「持軒伝」・「蘭洲伝」と呼んでいるのである。また、『懷德堂考』上巻の連載第一回目の末尾に、「他日更に懷德堂本紀とも云ふべきを物して、髫髯の創立より、竹山履軒の盛時、維新の廢学に及びて、其の始終を詳記せんと欲す」との予告が附されている。続編を「懷德堂本紀とも云ふべき」と述べていることも、当初天囚の構想した懷德堂研究は、学者一人ずつを取り上げて論じた伝記を束ねる形のものであったことを強く示唆する。^⑤

これに対して、『懷徳堂考』上巻の連載は、見出しを附された節が並ぶだけの構成とされ、節を束ねる章に該当するものは設けられていない。また、翌年の五月二日から七月九日まで大阪朝日新聞に連載された『懷徳堂考』下巻も同様の構成である。このため、天因は『懷徳堂考』上巻を執筆する際に、列伝形式を放棄したと考えられる。

列伝方式を放棄したのは、複数の学者が長く、複雑に関わった懷徳堂という学校を、列伝に収めて叙述することができなかったためと考えられる。詳しくは後述するように、天因が懷徳堂に関する資料『懷徳堂記録』を入手したのは明治四三年（一九一〇）一月二三日のことで、『懷徳堂考之一』を執筆するにあたってはまだ懷徳堂に関する理解が十分には深まっておらず、だからこそ天因は、『懷徳堂考之一』を持軒・蘭洲の列伝の形式で執筆したのであろう。加えて、天因は『懷徳堂考』上巻の連載開始時までにそのすべての原稿を完成させていたわけではなく、連載中に執筆した節もあったと推測される。節のみが並ぶ構成は、後から節の順序を変更したり、新たな節を追加したりすることが容易であり、このため天因はこうした節のみの形式としたと考えられる。

二 叙論

本章では、『懷徳堂考之一』前半部の叙論を中心に、主に天因が懷徳堂研究に着手した経緯等について検討する。

天因は叙論の冒頭で「大阪儒学。□以懷徳堂為主。以混沌社為客。」（大阪の儒学、□懷徳堂を以て主と為し、混沌社を以て客と為す。）と述べている。『懷徳堂考』上巻の序説でも「顧ふに我が大阪の漢文学派研究は、懷徳堂を以て経と為し、混沌社を以て緯と為す」と、また大阪人文会の講演においても、大阪の儒学は「懷徳堂を経にして混沌社を緯」としている。表現に少しく違いはあるが、懷徳堂を近世大阪における儒学の中心と位置付ける点は共通しており、天因の懷徳堂研究はこうした認識を基盤としていたことが分かる。

それでは、天因は『懷徳堂考之一』を、何故五井持軒・蘭洲父子から始めたのであろうか。持軒は懷徳堂が創設される五年前に死去しており、懷徳堂と直接には関係がない。また蘭洲は、周知の通り助教として懷徳堂の教学に関与したが、教学の中心とされる学主・教授ではなかった。懷徳堂の創設からではなく、懷徳堂の前史にあたる

持軒から論じた点に天囚の懷德堂研究の特色があると見てよいが、いささか不可解である。

おそらく天囚は、読者のそうした反応を予想し、叙論において「懷德書院事蹟。先着手於□（五）井父子者。抑有故也。」「（懷德書院の事蹟、先づ五井父子に着手するは、抑そも故有るなり。）と述べた上で、その理由を以下のように説明する。

先ず天囚は、近世大坂において、持軒が如竹散人に次ぐ初期の儒者である点を強調する。すなわち、天囚は如竹散人を近世大坂において最初に活動した儒者と見なすが、如竹の大坂滞在は僅か二三年で、その活動も不詳であるとした上で、「知如竹去後。三十二年。繼之講学者持軒也。」（如竹去りし後の三十二・三年、之を繼ぎて講学する者は持軒なるを知るなり）と、持軒を如竹に続く大坂の儒者と位置付ける。二人の関係の近さについて、天囚は持軒の章の「家系及び生年」節でも「持軒之生。在寛永十八年。距如竹下帷大阪時。為二三年後。」（持軒の生まるるは、寛永十八年に在り。如竹の帷を大阪に下す時より距つること、二・三年の後為り。）と強調している^⑥。

蘭洲について天囚は、懷德堂の創設直後に「主其日講者。持軒之子蘭洲也。」（其の日講を主る者は、持軒の子

の蘭洲なり）と、学主の石庵に代わって日講を担ったことに注目する。加えて、「石庵歿後。髡菴兼山長。而蘭洲官遊十餘年。歸則講廢。亦依蘭洲起講。学風復振。」（石庵の歿後、髡菴山長を兼ねて、蘭洲官遊すること十餘年、帰れば則ち講廢せられたるも、亦た蘭洲に依りて講を起し、学風復た振ふ。）と、中井髡菴が学主であった頃、懷德堂では講義が行われなかった時期があったのだが、そこに蘭洲が津輕藩を辞して大阪に戻り、講義を担って懷德堂を再興したとする。

このように天囚は、持軒が如竹に続く大坂の初期の儒者であることと、蘭洲が初期の懷德堂の教学において重要な役割を果たしたことを重視し、「可知懷德以前有持軒。懷德以後有蘭洲。以維持大阪儒学。実父子之力可多也。」（懷德以前に持軒有り、懷德以後に蘭洲有り、以て大阪の儒学を維持するに、実に父子の力多とすべきを知るべきなり。）と、持軒・蘭洲父子が近世大坂儒学の発展に寄与したことを極めて高く評価する。天囚は近世大坂儒学の発展に果たした二人の功績が大きいことを理由として、懷德堂研究を二人から始めたとしているのである。

興味深いことに、『懷德堂考』上巻の序説においては、懷德堂研究を持軒・蘭洲父子から着手する理由の説明が

『懷徳堂考之一』の叙論とはいささか異なっているように見受けられる。序説でも天因は「今予は先づ手を懷徳堂研究に着けて、而して五井持軒蘭洲父子より始まる者、抑も故あり」と、懷徳堂研究を持軒・蘭洲父子から始めることが奇異に思われることを予想した上で、『鶏肋篇』を濱和助から、『蘭洲文稿』を大田源之助からそれぞれ入手したことによって「蘭洲と懷徳堂との關係を詳にし」たことが理由であると述べている。大阪人文会における講演においても、天因は資料の入手が研究のきっかけであったことを同様に強調している。

もとより、『懷徳堂考』上巻の本文において天因は、「五井氏は慶元以後に於ける大阪最初の讀書人なり、大阪最古の儒林世家なり。」（五井蘭洲の父祖）と、五井氏が大阪で活躍した儒家として古いことに触れ、また序説でも「蘭洲の父持軒が大阪文学に偉功あるのみならず、其の祖父は大阪に於ける讀書人の祖なるを知」ったことが「懷徳堂研究の第一着として、持軒蘭洲の事蹟を叙述する所以」であると述べており、近世大阪の儒学史を問題としていたことが窺える。一方、『懷徳堂考之一』の叙論においても、濱和助から蘭洲手稿の『鶏肋篇』の提供を受け、また木崎好尚を介して又借りて大田源之助から『蘭洲文稿』を得たことの述べた上で、「微濱太田二君之篤

好而不□（吝）。則予曷得着手於此。」（濱・太田二君の篤好にして吝まざること微かりせば、則ち予曷ぞ此に着手するを得んや。）と、資料の入手が重要であったとしている。しかし、『懷徳堂考之一』と『懷徳堂考』上巻とを比較すると、『懷徳堂考之一』は父子の近世大阪儒学史に占める位置を、『懷徳堂考』上巻は資料の入手を、それぞれより重視しているように見受けられる。

私見では、『懷徳堂考之一』が父子の近世大阪儒学史に占める位置を重視しているのは、その執筆の目的と密接に関わっていると考えられる。注目されるのは、『懷徳堂考』上巻の序説において天因は、懷徳堂研究に着手した経緯を説明する中で、「人文会は各科の専家、門を分ちて担当す、庶幾くは闡顯憾なき得ん、但予れ末学を以て漢文学派研究の員に備るも杜撰の誹を免れざらんことを愧るのみ」と、大阪人文会において自らが「漢文学派研究」を分担したことに触れ、また人文会の講演においても、冒頭で「私は昨年の会に大阪の儒学を研究する様にと云ふ分担を承知致しました」と述べているのに対して、『懷徳堂考之一』の叙論で天因は、大阪人文会における分担に触れておらず、また資料を提供した濱・太田の二人が同会の会員であることも述べていない点である。

天囚が懷德堂を研究する直接の契機が、明治四三年（一九二〇）八月一九日に發起人会が開催され、九月四日に発会式が開催されて活動を開始した大阪人文会において、天囚が大阪儒学の研究を分担したことであったことは確実である。このことは、明治四二年（一九〇九）九月四日に開催された大阪人文会の発会式を報ずる、翌日付の大阪朝日新聞朝刊の記事「大阪人文会創立」において、天囚の研究事項が「大阪の儒学派」と記されていることから確認できる。⁸このため、『懷德堂考之一』の叙論において天囚が、研究に取り組む経緯の説明として大阪人文会での分担に言及し、濱・大田両名が同会の会員であることを述べていたとしても不思議ではないように思われる。にもかかわらず、『懷德堂考之一』にそうした言及がないのは、『懷德堂考之一』が大阪儒学に関する研究成果の報告書として執筆されたものであり、この研究に取り組む経緯については説明するに及ばないと天囚が判断し、割愛したためと考えられる。

天囚が『懷德堂考之一』の前半部を「極く略して」述べた大阪人文会での講演は、同会の会員が集まる前で行われたものであるため、同会の分担について言及しているのは自然なことと見てよい。また天囚が『懷德堂考』上巻の連載において同会における自らの分担について言

及したのは、大阪朝日新聞の読者に向けて大阪人文会を広くアピールするためだったと考えられよう。天囚が機会ある毎に大阪人文会をアピールしようとしたことは、『懷德堂考』上巻の序説に加えて、大阪朝日新聞紙上には明治四三年（一九一〇）九月の大阪人文会の発会式以来、同会の例会の活動が第五次例会を除いて毎回報じられており、その例会の記事は天囚が執筆した可能性が高いと考えられることから窺える。⁹大阪儒学研究の成果報告書として執筆された『懷德堂考之一』には、そうした市民向けのアピールは必要なく、後述する実証的な研究の成果のみが述べられたと推測される。

三 章・節の構成

続いて本章では、『懷德堂考之一』前半部の構成について、『懷德堂考』上巻の構成との比較を中心として検討する。

『懷德堂考之一』の叙論、及び五井持軒・五井蘭洲の各章、並びに両章に含まれる各節の見出しと位置とは、以下の通りである。

叙論（第一葉表二行目～第五葉表九行目）

五井持軒（第五葉表十行目）

家系及生年（第五葉表十一行目）第六葉裏一行目）

修学 其師承（第六葉裏二行目）第七葉裏一行目）

教授及び礼聘（第七葉裏二行目）第八葉表十行目）

学説（第八葉表十一行目）第九葉表九行目）
著述（第九葉表十行目）第九葉裏六行目）

人物德行（第九葉裏七行目）第十一葉表八行目）
臨終（第十一葉表九行目）第十一葉裏十行目）

妻子（第十一葉裏十一行目）第十二葉裏四行目）
有朋賛語（第一二葉裏六行目）第十四葉表二行目）

五井蘭洲（第十四葉表五行目）同七行目）

自叙伝（第十四葉表八行目）第十五葉表八行目）
幼時（第十五葉表九行目）第十六葉表三行目）

講学（第十六葉表四行目）第十七葉裏二行目）
父母之喪（第十七葉裏三行目）第十八葉表五行目）

積褐津輕（第十八葉表六行目）第二十葉表六行目）

三宅石菴（第二十葉表七行目）第二十一葉表六行目）

懷徳堂助教（第二十一葉裏一行目）第二十九葉裏五行目）

中風病歿（第二十九葉裏八行目）第三十一葉裏十行目）

子孫（第三十二葉表一行目）第三十四葉裏十二行目）

學術著書（第三十五葉一行目）第三十八葉表一行目）

風采人物（第三十八葉表二行目）第三十八葉裏九行目）

教育之功（第三十九葉第一行目）第四十三葉表九行目）

通儒全才（第四十三葉表十行目）第四十四葉表五行目）

著撰書目改題略（第四十四葉表七行目）第四十九葉表三行目）

五井蘭洲の章の「積褐津輕」の節の墨筆で記された見出しには、朱筆でその上に「（後）」、その下に「入于懷徳堂壁書之次」（懷徳堂壁書の次に入る）と書き込まれ

ているが、それらはいずれも上から墨筆の線が記されて見せ消ちにされている。またその次の節の墨筆で記された「三宅石菴」の見出しにも、朱筆でその上に「(前)」、その下のに下に墨筆で「入于持軒傳之後蘭洲傳之前」(持軒伝の後、蘭洲伝の前に入る)と書き込まれている。但し、「三宅石菴」の見出しに附された書き込みは見せ消ちとされていない。なお、「懷德堂壁書」との見出しの節は「懷德堂考之一」の前半部に存在しないが、「懷德堂助教」の節の中に懷德堂壁書が「懷德堂内事記」から引用されている。このため、「懷德堂壁書」とはおそらく「懷德堂助教」節のことを指すと推測される。こうした朱筆の書き込みは、天囚は当初「釈褐津輕」・「三宅石菴」・「懷德堂助教」の各節をこの順に執筆し、その後一旦は「釈褐津輕」と「三宅石菴」との順序を入れ替えることとしたが、その後その入れ替えを取り止めて、「三宅石菴」の節を持軒の章の末尾に移動し、かつ「釈褐津輕」の節を「懷德堂助教」の節の後に移動しようとしたことを示すと考えられる。

『懷德堂考』上巻の二〇回に及ぶ連載は、以下のように、各回それぞれ一つから三つの節が掲載された。¹⁰⁾

(一) 序説

- (二) ○五井蘭洲の父祖○持軒の師承○四書屋加助
- (三) ○持軒の学○持軒の風貌性行○持軒臨終と妻子
- (四) ○三宅石菴の来歴○石菴と持軒
- (五) ○五井蘭洲の生立○中井塾菴の来阪
- (六) ○蘭洲と塾菴○蘭洲至孝と大火○石菴と含翠堂¹¹⁾
- (七) ○懷德堂創立
- (八) ○懷德堂開講 石菴坐談▲蘭洲日講▲誠所助講▲執斎東涯の来講○懷德堂の壁書
- (九) ○懷德堂の学風○塾舎及び規約
- (十) ○石菴の学問著述○石菴の生平歿年
- (十一) ○塾菴と懷德堂
- (十二) ○塾菴の學術性行○塾菴の遺言
- (十三) ○蘭洲の西帰
- (十四) ○蘭洲と懷德堂
- (十五) ○蘭洲の學術
- (十六) ○蘭洲の著書
- (十七) ○蘭洲の風采人物○蘭洲の晩年と子孫
- (十八) ○三宅春楼○五同志(上)
- (十九) ○五同志(中) 附富永仲基
- (二十) ○五同志(下) ○諸同志人名

『懷德堂考之一』の見出し・本文が、和文の資料を引

用した箇所を除いて漢文で記されているのに対して、『懷徳堂考』上巻は見出し・本文とも漢字仮名交じり文であるため、両者の見出し・本文の表現にはもとより異なるところがある。しかし、節の内容にはかなり重複が認められ、特に『懷徳堂考之一』の持軒の章の各節は、一部結合されたものがあるが、『懷徳堂考』上巻の連載第一―三回に掲載された各節とはほぼ対応している。

蘭洲の章の各節も、部分的に節の順序の変更や節の結合が認められるものの、『懷徳堂考之一』の各節と『懷徳堂考』上巻の各節との間には、概ね対応が認められる。すなわち、『懷徳堂考之一』の「父母之喪」・「三宅石菴」・「學術著書」・「風采人物」・「著撰書目改題略」の各節は、概ね連載の「蘭洲至孝と大火」・「三宅石菴の来歴」・「蘭洲の學術」・「蘭洲の風采人物」・「蘭洲の著書」の各節に相当する。また「釈褐津輕」の節と「通儒全才」の節とは、連載においてはそれぞれ「蘭洲の西帰」・「蘭洲の學術」の節に含まれており、「懷徳堂助教」の節の内容は連載の「懷徳堂創立」・「懷徳堂開講」・「懷徳堂の學風」の節に含まれている。更に、『懷徳堂考之一』の「自叙伝」・「幼時」・「講学」の節、また「中風病歿」・「子孫」の節は、連載ではそれぞれ結合されて「五井蘭洲の生立」・「蘭洲の晩年と子孫」とされている。「教育之功」の節の内容は、

連載では概ね「蘭洲の學術」・「三宅春楼」の節に含まれている。

しかし、『懷徳堂考』上巻の「懷徳堂創立」・「懷徳堂開講」・「懷徳堂の壁書」・「懷徳堂の學風」・「塾舎及び規約」の諸節は、内容的に『懷徳堂考之一』の蘭洲の章の「懷徳堂助教」の節の中に部分的に含まれているところがある。このことは、『懷徳堂考』上巻の執筆にあたり、天囚は基本的に、『懷徳堂考之一』の各章・節の構成や内容を基盤としながらも、特に蘭洲について述べる部分について、創設期の懷徳堂に関する叙述を充実させるため新たな節を大幅に加えて再構成し、それに伴って前述したように『懷徳堂考之一』の列伝形式を放棄したことを示すと考えられる。

『懷徳堂考之一』や『懷徳堂考』上巻の連載を執筆した明治四三年一月から二月の段階において、天囚の懷徳堂に対する理解を支えていたのは、主に大田源之助から提供を受けた『蘭洲遺稿』の記述と『懷徳堂資料』とであったと推測される。おそらく天囚は、特に『懷徳堂資料』によって懷徳堂に対する理解が進んだことから、列伝形式を放棄し、新たな節を加えて再構成を行う必要があると判断したと考えられる。

大田が天囚に提供した『懷徳堂資料』とは、大田が大阪市史編纂掛が『大阪市史』編纂のために蒐集した資料の中の、懷徳堂関係のものを書写して作成したものであり、大田は『蘭洲遺稿』に続いて、『懷徳堂資料』・『浪華名家碑文集』も天囚に提供した。¹²『懷徳堂記録』の中には、明治三五年（一九〇二）一二月に中井木菟麻呂が大阪市史編纂掛の幸田成友に送った「学問所建立記録」・『懷徳堂定約附記』・「履軒先生肖像」・『懷徳堂内事記』・『懷徳堂外事記』・「学校公務記録」・『懷徳堂義金簿』・「三宅幸藏変宅ニ付御同志中へ懸合候覚」・「逸史献上記録」・「義金助成金簿」・「御同志中相談覚」の他に、明治四二年（一九〇九）二月に送った「懷徳堂記録拾遺」、並びに森本専助が大阪市史編纂掛に提供した「懷徳堂定約」が収録されている。

もとより天囚は、『懷徳堂考之一』前半部を執筆する際にも、『懷徳堂記録』・『浪華名家碑文集』を活用している。例えば、「釈褐津軽」節の頭注には『懷徳堂内事記』からの引用があり、また別に『懷徳堂外事記』も注記の中に引用されている。更に、複数の節には「浪華名家碑文集」所収の竹山撰の蘭洲の墓碑銘「蘭洲五井先生之墓」からの引用がある。加えて、大阪人文会における講演の中でも、天囚は『懷徳堂内事記』所収の懷徳堂の壁書に

言及している。

しかし、例えば『懷徳堂考』上巻の「塾舎及び規約」節には、懷徳堂における謝儀について『懷徳堂内事記』の引用があるが、『懷徳堂考之一』には謝儀に関する記述はない。天囚は明治四三年（一九一〇）一月二九日の大阪人文会での講演までに『懷徳堂考之二』前半部の執筆を終えていたわけだが、『懷徳堂記録』・『浪華名家碑文集』を入手してから『懷徳堂考之一』を執筆するまでの期間は非常に短かった。そうした時間的制約のため、天囚が『懷徳堂記録』から『懷徳堂考之一』に取り込むことのできた情報には限りがあったと考えられる。

天囚が大田の提供した資料を入手した時期は、一般財団法人懷徳堂記念会が二〇一六年に購入し、大阪大学附属図書館総合図書館に収蔵された大田源之助の『書籍貸借録』の記述により概ね明らかとなった。すなわち、天囚が『蘭洲遺稿』を入手したのは明治四三年（一九一〇）一月一五日以降であり、また『懷徳堂記録』・『浪華名家碑文集』を入手したのは同月二三日である。¹³前述の通り、『懷徳堂考』上巻の連載が始まった時点で、天囚はその原稿のすべてを完成させてはおらず、連載開始後に執筆した節があったと考えられる。天囚はおそらく、大田の提供した資料から懷徳堂についての理解を深めつつ連載

の原稿を執筆し、その中で『懷徳堂考之一』には無かった新たな節を設けて、創設期の懷徳堂に関する叙述を充実させた⁽¹⁴⁾と推測される。

以上、本章では、『懷徳堂考之一』前半部と『懷徳堂考』上巻との構成や関係について考察した。次章では、『懷徳堂考之一』前半部の叙述を通して窺える、天因の研究姿勢について検討する。

四 典拠の明示

『懷徳堂考之一』前半部の本文は基本的に、依拠した資料の引用と天因自身の文章とにより構成されている。注目すべき点は、『懷徳堂考之一』の記述においては、引用した資料の名が個々に明示されており、『懷徳堂考』上巻と較べて、実証的な研究の姿勢が顕著であることである。

例として、先ず『懷徳堂考』上巻の「持軒の師承」節を見てみよう。

持軒幼より態度凡ならず、祖父守香と同居して其の庭訓を受け、年十五の明暦元年（此歳如竹歿）には、笈を負ひ京師に遊びて、伊藤仁齋中村惕齋二翁に師

事し、貝原益軒兄弟（兄の存齋か弟の恥軒か不詳）、及び松下見林等と交れり、持軒十五の時には、惕齋年二十七にして朱學を篤信し、仁齋は三十、學風未だ一變せず、益軒も亦未だ大疑を發せざる時なれば、持軒は此の諸儒に従ひて、程朱の學を研窮せしなり、時に山崎闇齋京に在りて儒宗と稱せらる、持軒往きて見んと欲し、之を益軒に謀りしに、益軒之を可とせざりけるより止みたりとぞ。

儒醫兼學は當時の習尚なり、持軒も初め醫方を向井靈蘭（元升）中島長安二子に學び、名を重節と稱しき、或る時一婦人を療治して方劑を誤りしより、予は之を活さんとして、反て之を死に致せしこそ淺ましけれとて、遂に醫を改めて儒と爲れり、時に備前の芳烈公は、儒術を尊崇して、學校を設け聖廟を建て、儒生を重用せられるより、持軒も亦備前に遊べり、人の之を公に薦むる者ありしが爲にや、行狀には意喜びざる有りて、復た京師に反るとあり、時に熊澤蕃山は已に備を去りし後なるが、如何なる事情かありけん。

十五洛に入てより十年餘の游學に、業成りて大阪に歸りしは、實に年三十の寛文十年なりき。

「行狀には意喜びざる有りて、復た京師に反るとあり」と、持軒は芳烈公（池田光政）の治める備前藩にいたことがあり、何らかの不満があつて京に戻つたと「行狀」に述べられているのを引用した一箇所を除いては、記述の根拠となつた資料が示されていない。もとより、天因は冒頭の「五井蘭洲の父祖」節の中で「五井蘭洲に持軒先生行狀（鶏肋篇）あり、伊藤東涯に持軒先生五井君墓碑銘（紹述先生文集）あり、梁田蛻巖は医官柳川牛山に代りて持軒先生伝（蛻巖集）を作れり、三者を參看して其の事蹟を按ず」と、以下の記述は「行狀」・「碑文」・「蛻巖集」の三資料に依拠しているとしてゐる。⁽¹⁵⁾冒頭に典拠をまとめて示し、基本的に個々の記述の典拠には触れない形を取っているのである。

これに対して『懷德堂考之一』の「五井持軒」の章の冒頭の「家系及生年」節では、以下のように述べられている。

行狀云。態度不凡。⁽¹⁶⁾為父祖鍾愛。成童志於學。負笈之京師。⁽¹⁷⁾其成童為明曆元年。如竹以此歲歿。

蛻巖集云。先生同禪休居。習読写。稍長。志和歌。受業下河辺長流。聞萬葉古今等要義。既入洛。与當時諸名儒。研窮程朱之學。

持軒入洛。游伊藤仁齋中村惕齋二先生之門。⁽¹⁸⁾持軒少於仁齋十五歲。仁齋唱古學。号古義堂。在三十六時。⁽¹⁹⁾東涯行狀持軒當是二十一。惕齋生於寛永六年。長於持軒十二歲。

持軒以十五入洛。則仁齋三十學風未一變。惕齋時年二十七也。⁽²⁰⁾（碑文云達成童游學在都）

行狀云。与貝原玄湛存齋名元瑞、⁽²¹⁾益軒、松下見林、諸先生友善。

碑文云。其所尊信者。仲村惕齋先生。而先子亦與焉。貝原二先生。⁽²²⁾益軒恥軒及松下見林。栗栖八尾等諸老。皆其所友善也。⁽²³⁾益軒長於持軒十一歲。

惕齋篤信朱學。仁齋亦始修宋學。持軒之學可知也。與益軒交。亦在未著大疑錄之前。

初學医方於向井元升。⁽²⁴⁾行狀中嶋長安二子。⁽²⁵⁾行狀初為医称重節。碑文療一婦人。方剂不適。乃嘆曰。將以活之。反致人死。遂改業為儒。

行狀云。山崎闇齋亦一時儒宗。乃欲往見之。謀之益軒。益軒不可乃止。

時備陽侯方隆推儒術。建孔廟。設教館。逢掖輻湊。於是如備。然意有不喜。復反京師。留學凡十數年。⁽²⁶⁾其或見蕃山乎蕃山以明曆三年去備入京寛文九年自赤石入岡山。寛文十年。業成歸大阪。時年三十矣。⁽²⁷⁾

【書き下し文】

「行状」に云ふ、「態度凡ならず、父祖の鍾愛と為る。成童にして学に志す。笈を負ひて京師に之く」と。

其の成童たるは明暦元年為り。如竹此の歳を以て歿す。

『蛻巖集』に云ふ、「先生禪休と^{とも}に居り、読写を習ふ。稍長じて、和歌に志し、業を下河辺長流に受け、万葉古今等の要義を聞く。既にして洛に入り、當時の諸名儒と、程朱の学を研窮す」と。

持軒 洛に入りて、伊藤仁斎・中村惕斎二先生の門に遊ぶ。^{持軒仁斎より少きこと十五歳なり。仁斎古学を唱へて、古義堂と号すること三十六の時に在り、東涯「行状」}持軒当に是れ二十一・二なるべし。惕斎寛永六年に生まれ、持軒より長ずること十二歳なり。

持軒十五を以て洛に入れば、則ち仁斎三十にして学風未だ一変せず。惕斎時に年二十七なり。〔碑文〕に云ふ、「成童に逮びて游学して都に在り」と。）

「行状」に云ふ、「貝原玄湛^{存齋、名は元端}、益軒、松下見林、諸先生と友善たり」と。

「碑文」に云ふ、「其の尊信する所の者は、仲村惕斎先生にして、先子も亦た焉に与す。貝原二先生^{益軒恥軒}、及び松下・栗栖・八尾等の諸老は、皆其の友善たる所の者なり」と。^{益軒持軒より長ずること十一歳。}

惕斎篤く朱学を信ず。仁斎も亦た始め宋学を修む。持軒の学知る可きなり。益軒と交るも、亦た未だ『大疑録』を著さざるの前に在り。

初め医方を向井元升「行状」・中嶋長安二子に学ぶ。「行状」に云ふ、「初め医を為び重節と称す」と。〔碑文〕に云ふ、「一婦人を療すに、方剂適せず。乃ち嘆きて曰はく、『將に以て之を治めんとして、反りて人を死に致す』と。遂に業を改めて儒と為る」と。〔行状〕に云ふ、「山崎闇斎も亦た一時の儒宗たり。乃ち往きて之に見えんと欲し、之を益軒に謀るに、益軒可とせず、乃ち止む。

時に備陽侯方に儒術を隆推し、孔廟を建て、教館を設け、逢掖 輻湊す。是に於て備に如く。然れども意喜ばざる有り、復た京師に反る。留学凡そ十数年其れ或は蕃山を見るか、蕃山明暦三年を以て備を去り京に入る。寛文九年明石より岡山に入る。

寛文十年、業成り大阪に帰る」と。時に年三十なり。

天因は「行状」・「碑文」・「蛻巖集」から関連する記述を引用し、その上で持軒の修学についての自らの考えを注や本文に織り交ぜて論述しており、これは『懷徳堂考之一』における天因の基本的なスタイルとなっている。

注目されるのは、引用された個々の資料の名が基本的にすべて明示されている点である。¹⁶⁾ 先に見た『懷德堂考』上巻の記述は、天囚が三種の資料の中のどの資料に基づいているのかがほとんど判別できなかった。このため、実証性に関して問題があると見なされかねない危険性があるのに対して、典拠を個々に示している『懷德堂考之一』には、そうした問題が生ずる恐れはない。

興味深いことに、持軒が当初医学を向井元升に学んだことを述べる「初学医方於向井元升」との一文は「碑文」と「行状」との両方にあるが、「碑文」は「向井元升」に続いて「中嶋長安二子」とあり、「行状」は中嶋について触れていない。天囚が『懷德堂考之一』において「向井元升」の語の後に割り注で「行状」と記し、続けて「中嶋長安二子」と本文に記した上で、その後の割り注に「行状初為医称重節」（行状に、初め医を為し重節と称す）との「行状」の別の箇所に記載されている情報と、「碑文」の語とを記しているのは、こうすることによって依拠した二種の資料の記述の違いをも示そうとしたためと考えられる。¹⁷⁾ 天囚の慎重な資料の扱いと丁寧な考証とが窺える。

もっとも、天囚自身の文章である「持軒入洛。」に続く「游伊藤仁斎中村惕斎二先生之門」（伊藤仁斎・中村

惕斎二先生の門に遊ぶ）の一文は、一見すると天囚の地の文に見えるが、実は「行状」の中に存在する。天囚は「行状」から引用したのだが、そのことを明示し忘れたと思われる。また、引用の際の誤字も認められ、そうした瑕疵も一部認められるが、『懷德堂考之一』において天囚は、基本的に丹念に出拠を示し、実証的に論述している。このことは、前述したように、『懷德堂考之一』が大阪人文会で分担した研究の成果報告書として執筆されたこととおそらく深く関係すると考えられる。

もとより、『懷德堂考』上巻においても典拠が示されることはある。例えば「懷德堂の学風」節と「蘭洲の西帰」節とにおいては、『懷德堂記録』に収録されている『懷德堂内事記』が典拠であることが示され、また「懷德堂の学風」節には、『懷德堂内事記』・『懷德堂定約』・『懷德堂内事記』・『懷德堂定約』を典拠とする記述が、典拠を示しつつなされている。しかし、『懷德堂考之一』と比較して、『懷德堂考』には記述の典拠を明示することが圧倒的に少なく、『懷德堂考』上巻の記述からは根拠となった資料が不明であっても、『懷德堂考之一』の内容の重複する部分の記述と照合するならば、天囚の依拠した資料が詳細に把握できるのである。このため、『懷德堂考之一』は、天囚の懷德堂研究が実証的であったこ

とを証明するものとして、天囚の学問を理解する上で極めて重要な資料と位置付けることができる。

おわりに

『懷徳堂考』上巻の連載が掲載された明治四三年（一九一〇）二月には、同年一月末の大阪人文会の例会において決まった懷徳堂記念祭の挙行実現に向けて、その準備が始まっていた。また天囚は、同年四月から朝日新聞主催の世界一周に出かけることも決まっていた。このため、この時期の天囚はかなり多忙であったと推測される。天囚がその中で『懷徳堂記録』などの資料を読み進め、他の資料をも蒐集し、かつ調査も行いながら、『懷徳堂考之一』前半部を基盤としつつも大幅な改変を加えて『懷徳堂考』上巻を執筆したということは、天囚の資料の読解と原稿の執筆とが驚異的な早さであったことを示している。

『懷徳堂考』上巻の草稿である『懷徳堂考之一』の発見により、天囚の懷徳堂研究が実証的であったことが明らかとなったが、『懷徳堂考』上巻において典拠の明示が少ないのは、やはりそれが新聞紙上に連載された一般向けのものであり、専門的な研究書ではなかったことが

主要要因と推測される。留意すべき点は、天囚の研究の多くは大阪朝日新聞に連載されており、『懷徳堂考』上巻以外についても、やはり新聞紙上に発表されたものであることにより何らかの制約を受けた可能性が考えられる点である。そうした点についての解明は、今後の課題としたい。

注

- (1) 拙稿「研究ノート・西村天囚の懷徳堂研究とその草稿―種子島西村家所蔵西村天囚関係資料調査より―」（『懷徳堂研究』第一〇号、二〇一九年）、「翻刻 西村天囚著『懷徳堂考之一』（その一）」（『島根大学教育学部紀要』第五五巻、二〇二二年）、同「（その二）」（同第五六巻、二〇二三年）、同「（その三）」（第五七巻、二〇二四年）、同「（その四）」（第五八巻、二〇二五年刊行予定）参照。

- (2) 大阪人文会第二次例会において、天囚はこの五〇枚の漢文の草稿を略して講演を行った。拙稿「資料紹介 西村天囚述「五井蘭洲」（大阪人文会第二次例会講演速記録）」（『国語教育論叢』第一八号、二〇〇九年）参照。

- (3) 修復は、所有者である西村貞則氏の諒解を得て、国立大学法人島根大学平成三〇年度萌芽研究部門「西村天囚関係新資料の研究」（代表者・竹田健二）により行なった。

(4) 以下、資料を引用する際、漢字は基本的に通行の字体に改めた。

(5) 天囚の代表的著作の一つである『学界の偉人』(明治四十四年一月、杉江梁江堂)も基本的には列伝形式であり、明治末に天囚が取り組んだ近世漢学者の研究は、列伝形式を基本としたと思われる。

(6) 『懷德堂考』上巻の「持軒の師承」の節においても、天囚は「如竹去て持軒生れしは、其の替身とも謂ふべきか」とまで述べている。なお、『懷德堂考之一』において天囚は、如竹散人に続く大坂の儒者として一井鳳梧に触れてはいるが、鳳梧に対する天囚の評価は低く、『浪華人物志』が鳳梧を大坂における講学の始めとしていることにも同意しない。ちなみに『懷德堂考』上巻における鳳梧への言及は、序説に「懷德以前に如竹鳳梧の徒あり」と述べている他、「四書屋加助」節において、如竹が去った後は鳳梧が大坂で活動したが、その時期は持軒よりも後と考えられると述べる程度である。

(7) 『懷德堂考』上巻の序説や『懷德堂考之一』においては、懷德堂研究を持軒・蘭洲父子から始める理由として、蘭洲が竹山・履軒の師であったことには特に言及していない。なお、『懷德堂考』上巻の「蘭洲の学術」節で天囚は、蘭洲は「眞に是れ通儒全才にして、竹山履軒の師たるに背かざる慶元以來の大阪の一大家なり」としている。

(8) ちなみに、この時「儒家事蹟」の事項を分担したのは「濱真砂、太田蘆隱」、すなわち濱和助と大田源之助である。

(9) 多治比郁夫「中之島図書館物語」(大阪人文会「覚え書」(大阪府立図書館報「なにわづ」七二号、一九七八年)は、大阪府立図書館の館務日誌の記事と大阪朝日新聞の記事とに基づき、大阪人文会の発会式から、第五次例会を除いて明治四三年(一九一〇)十一月開催の第七次例会までの活動を紹介している。多治比氏は第五次例会について不明とするが、明治四三年七月に通常の大阪府立図書館ではなく、網島の料亭「鮎字」で開催された。拙稿「中井木菟麻呂が受け継いだ懷德堂の遺書遺物―小笠原家に預けられたものを中心に―」(中国研究集刊』第六三号、二〇一七年。後『懷德堂研究第二集』(汲古書院、二〇一八年)に収録)参照。

(10) 「五同志」の節は連載では三回に分けて掲載されたが、単行された際には一つの節にまとめられている。

(11) 「石菴と含翠堂」の節について、『懷德堂考』上巻が単行された時に附された目次に記載がないのは、単行の際に作成された目次の誤りである。

(12) 拙稿「西村天囚の五井蘭洲研究と『懷德堂記録』」(『懷德堂研究』第七号、二〇一六年)・「西村天囚の五井蘭洲研究と関係資料―『蘭洲遺稿』・『鶏肋篇』・『浪華名家碑文集』について―」(『懷德』第八五号、二〇一七年)参照。

(13) 拙稿「懷徳堂文庫新収資料中の太田源之助旧蔵資料」(『懷徳堂研究』第八号、二〇一七年)、参照。

(14) 『懷徳堂考之一』の後半部は大阪人文会での講演の後に記されたと思われる。拙稿「西村天因の懷徳堂研究と『拙古先生筆記』」(『懷徳堂研究』第一三号、二〇二二年)、「西村天因と含翠堂」(『懷徳』第九一号、二〇二三年)参照。

(15) この点は『懷徳堂考之一』においても「持軒行状。蘭洲撰之。請伊藤東涯作墓碑銘。其文載在紹述先生文集。持軒門人柳川牛山請梁蛻巖代作持軒先生」[伝]在蛻巖集中。不必贅述。今摘其要」(持軒の行状、蘭洲之を撰し、伊藤東涯に請ひて墓碑銘を作る。其の文 載するに『紹述先生文集』に在り。持軒の門人・柳川牛山、梁蛻巖に代作を請ひたる「持軒先生伝」は『蛻巖集』中に在り。必ずしも贅述せず、今其の要を摘る)と述べられている。

(16) 持軒が京で仁斎と惕斎とに学んだことについては、伊藤東涯の著した「先府君古棠先生行状」も引用しているが、その際も典拠は「東涯行状」であると明示している。

(17) 割り注の「碑文」は、以下に続く「療一婦人。方剂不適。乃嘆曰。將以活之。反致人死。遂改業為儒。」が「碑文」を出拠とすることを示そうとしたと考えられる。

(18) 「行状」からの引用について、天因が研究に用いた大阪府立中之島図書館・朝日新聞社文庫所蔵の『鶏肋篇』の「持軒先

生行状」は、「為父祖鍾愛」とあるところを「甚為父祖鍾愛」に、「時年三十矣」を「時三十矣」に作る。引用した際に誤写したのであろう。また割り注の中の「存齋名元瑞」の「元瑞」は「元端」、「赤石」は「明石」の誤字と考えられる。天因が懷徳堂研究に用いた資料については、拙稿「西村天因の五井蘭洲研究と関係資料——『蘭洲遺稿』・『鶏肋篇』・『浪華名家碑文集』について——」(『懷徳』第八五号、二〇一七年)参照。

(19) 例えば、「石菴の学問著述」節の、石菴の遺稿が春樓の時に盗まれたことについて、『懷徳堂考之一』には「懷徳堂外事記」の「安永元年極月廿二日。三宅才次郎方へ夜四時盜賊忍入。先代之遺稿雜記之入候骨脚紛失。」に基づくことが示されているが、『懷徳堂考』上巻には示されていない。

〔附記〕本研究は、JSPS科研費JP21H00465「日本近代人文学の再構築と漢学の伝統——西村天因関係新資料の調査研究を中心として——」の助成を受けたものである。